『英和对訳袖珍辞書』研究史における勝俣銓吉郎

遠 藤 智 夫

は じ め に

早稲田大学図書館蔵『洋学文庫』は、大槻家旧蔵書・第4代図書館長故岡村千曳^{ちびき}氏旧蔵書・故勝俣銓吉郎教授旧蔵書などから構成され、蘭学・洋学の第一級資料を多数含むことが知られている。Cナンバー勝俣旧蔵書の英学資料の中には、本邦初の活字本英和辞書で稀覯^{きこう}本の誉れの高い『英和对訳袖珍辞書』文久二年刊初版も含まれている。

さて、本稿は、本学会創立40周年記念第41回全国大会（2004年10月31日）での筆者の口頭発表資料に加筆修正をしたものである。当日の発表は、勝俣銓吉郎が大正15年に行った British Museum ばりの臨場講演形式の実物教授にあやかろうと、会場校早稲田大学国際会議場の OHC という文明の利器を用いて試みたものであったが、本論考では、『英和对訳袖珍辞書』研究史における勝俣銓吉郎の業績に焦点を絞ってみた。

氏の英学上の業績については、今さら付け加えることもないが、本邦初の本格的英和辞典『英和对訳袖珍辞書』についての初めての詳細な紹介「最初の英和对訳字書」を、今から、90年も前に『英語青年』に発表した氏の業績を、日米和親条約締結百年記念の年で、また本学会創立40周年の節目の年に、ふりかえることができた記念に、発表の詳細を残すことも意味無しとは言えまい。

大正三年に、勝俣銓吉郎が『英語青年』に2回にわたって発表した「最初の英和对訳字書」の中で、「文久版は僅に二百部しか印刷しなかった」と、初めて発行部数にふれたことは注目に値しよう。筆者は、大槻文彦論文との比較調査を試みながら、初版の発行部数について、調査に基づく若干の考察を加えることにする。

I 勝俣銓吉郎年譜

明治5年（1872）11月18日、神奈川県足柄下郡に生まれる。生家は旅館業であったが、家産傾き、少年期より苦学する。本名銓吉、通称銓吉郎。

明治18年（1885）横浜郵便局書記と成り、earn and learn の生活が始まる。この間、山手百二十番にあったミッション・スクール横浜英和学校に通学、西洋人より、英語の手ほどきを受ける。

明治29年（1896）上京、国民英学会に入学、岡倉由三郎等に影響を受ける。氏が受けた専門教育は、この1年足らずで、あとは一切独学であった。

明治30年（1897）Japan Times 社創立と同時に入社。

明治31年（1898）『青年（The Rising Generation）』（『英語青年』の前身）第1号を、武信由太郎編集長と二人で編集、Japan Times 社から発行。

〔語録〕「私のほんとうの母校は、ジャパン・タイムス社ですよ。」

明治34年（1901）東京府立第四中学校教諭心得。

〔語録〕「英字新聞の記者から、英語の先生に転向した。how は手に入ったが、頭が空っぽで、what の方が乏しかったから、大いに読書して思想力を養おうと思った。」

明治35年（1902）三井鉱山合名会社に入社、団琢磨専務理事の英文秘書となる。

明治36年（1903）ハワード・スワン（Howard Swan）・勝俣銓吉郎共著『応用英和新辞典』発行。

明治39年（1906）早稲田大学講師。

明治42年（1909）神田乃武・南日恒太郎共編『英和双解熟語大辞典』の発案・材料収集を行う（Prefaceに、記載されている）。

明治44年（1911）早稲田大学教授に昇任。『英和例解要語大辞典』出版。

〔語録〕‘A teacher of English should be a cultivator of love of language, love of knowledge, and love of Man.’

〔語録〕「編者は過去二十余年、外に在っては、ポケットに note-book を絶やさず、家に在っては左右に手帳と鉛筆とを離さず、英語研究の資料となる見聞事項の採録を怠らなかった。note-book habit の産物である。」

大正3年(1914)「古い会話書」を『英語青年』第三十巻第七号・第八号・第九号に発表。「最初の英和对訳字書」を『英語青年』第三十二巻第一号・第二号に発表。

大正10年(1921)「日本欧化史の片影＝徳川時代に於ける英語研究」を『我等』第三巻第十一号・第十二号に発表。

昭和11年(1936)『日本英学小史』を研究社から出版。66歳。

昭和14年(1939)『英和活用大辞典』を研究社から出版。

〔語録〕「早稲田で私の教えた英語は、その性質において他の先生と違った点が一つある。他の先生の英語は、学校で「習った英語」を教えるのに対し、私のは実社会で「使った英語」を教えたのである。learnした英語とuseした英語、すなわち language と speech の違いがあった。」

昭和15年(1940)「徳川時代の洋書」を『学鎧』4巻4号に発表。

昭和18年(1943)早稲田大学教授停年退職。

昭和19年(1944)早稲田大学名誉教授の称号を贈られる。(早稲田大学勤続38年)

昭和25年(1950)立正大学文学部教授。77歳。

昭和26年(1951)富士短期大学初代学長。

昭和29年(1954)『新和英大辞典』第3版を研究社から出版。(第2版は、武信由太郎編)「日本で最初の英和辞典」を月報『辞書』第二号、研究社に発表。

昭和32年(1957)英語学の研究業績により、我が国英学者として、初めて、紫綬褒章を授与された。

なお、「褒章の記」には、「勝俣銓吉 早くから英語学の研究並びに日本語彙の集成に精進し英和活用大辞典及び新和英大辞典を刊行してよくその業績を残しわが国英語学の進展に貢献し事績まことに著明であるよって褒章条例により紫綬褒章を賜って表彰せられた。昭和三十二年十一月三日 内閣総理大臣 岸 信介・・・ 第一一六号」とある。

昭和33年(1958)『新英和活用大辞典』を研究社から出版。85歳。

〔語録〕「もう5年、91歳までは生きて、さらに、三冊の辞書編集を終わらせたい。」

昭和34年（1959）9月22日、逝去。86歳。遺言により、早稲田大学図書館へ、「勝俣文庫」納入。

「英学者の生涯－勝俣銓吉郎翁追悼」か『英語青年』第百五巻、第十二号 pp 22-40に掲載される。

昭和46年（1971）早稲田大学図書館編『洋学文庫目録〔稿〕』に、勝俣旧蔵書が記載され、同図書館で、届出制で閲覧可能となる。

以上は、『英語青年』第百五巻、第十二号、昭和34（1959）12 1「英学者の生涯－勝俣銓吉郎翁追悼」中の上井磯吉「勝俣銓吉郎翁略伝」をもとに、増田綱・矢吹勝二・増田貢の追悼文から「語録」を補充し、勝俣氏の英学関係発表論文・勝俣旧蔵書の件などを追加した。

Ⅱ 『英和对訳袖珍辞書』に初めて言及した大槻文彦論文

- 1 大槻文彦「和蘭字典文典の記述起原」『史学雑誌』第九編第三号、明治31（1898）3 10、pp 12-13

[英学の興るに及び英和对訳辞書の必用起れること論を待たす]① [是に於て堀辰之助^{マサキ}(1) 高島太郎(秋帆の孫) 箕作貞一郎手塚節蔵(後に大築拙蔵)等]② [「ピカルト」の英蘭対訳辞書を採りて(「ホームホフ」の英蘭対訳辞書の舶来は是より後なりと云ふ)]③ [蘭語を削りて和蘭字彙中なる和訳語を当てて英和对訳忽ち成りて]④ [文久二年十二月]⑤ [幕府の開成所より発行せり]⑥ [鉛製活字を用いて]⑦ [雁皮紙の]⑧ [両面摺にて]⑨ [横本西洋綴一冊なり]⑩ 「右の開成所版の辞書、始めは一冊の価二両程なりしに英学の勃興するに随ひて需要極めて多くなりて後には一冊の転売拾両乃至貳拾両にも及べり」⑪ (2)

- 2 大槻文彦『復軒雜纂』、明治35年（1902）、p 217
同上。

- 3 大槻文彦『箕作麟詳君伝』明治40年（1907）、p 20

[文久中]⑤ [洋書調所にて]⑥ [教授堀達之助、英和辞書を編し、麟祥君、及び千村五郎、竹原雄四郎、渡辺欣三等、これを補助して、]② [文久二年刊行せり]⑤ [是れ我か邦、英和对訳辞書の嚆矢なり、]⑩ 「尋て（筆者庄 ついて）、堀越亀之助、（愛国）これを校正増補して、慶応二年再刊す、」⑬ 「後の英和辞書率ね（筆者庄 おおむね）これに拠れり、」⑭

Ⅲ 『英和对訳袖珍辞書』を詳細紹介した勝俣論文

- 1 「最初の英和对訳字書」『英語青年』第三十二巻第一号、大正3年（1914）10 1、p 19

・・・一体日本の英和字書なるものは何てあって、誰か編纂し、とうして出来たものであらうか・・・僕は数年前から英学原流の研究に興味を持ち始め自然この問題にも注意を払って居たかまた十分の研究が届かないので不満足ではあるか兎に角古老の直話やら群書の歩瀛やらて多少纏まった知識が得られたのであるから本誌の一隅を拝借して同好の士の一粲（筆者庄 いっさん）に供する次第である。

『英和对訳袖珍辞書』

[これか即ち我邦に於ける板行英和字書の魁（筆者庄 さきかけ）て]⑫⑬ 英語では A Pocket Dictionary of the English and Japanese Language としてある。出版年月は [ペルリ艦隊か浦賀の門を敲いてから十年後]①の [文久二年十二月で]⑤ [当時海内唯一の官立外国語学校蕃書調所で編纂されたもので]⑥⑭ あるから言はは旧政府から新日本への置土産である。[編纂に関係した人々は序文にも歌ってある通り同所（序文には the School of European Languages としてある）の教官堀辰之助西周助（西周）、千村五郎、竹原勇四郎、箕作貞一郎（麟祥）等で]②⑤ 全然日本人の手に成ったものである。

堀 辰之助

この字書（以下便宜上「開成所辞書」と云ふ）の編纂に最も力を尽されたのは堀辰之助で、もと長崎の和蘭通詞出身で・・・弘化二年といふに浦賀詰めを命せられた人て・・・ペルリか来航の時にも氏は通訳に当たったので「通弁骨折り候訳を以って御褒美」として銀拾五枚頂戴している。・・・安政六年十月に蕃所調所の頭取古賀謹一郎の周旋で・・・調所の教員に採用され専ら英語の教授に当り傍ら英和字書の編纂に

従事することとなった。字書の編纂は文久元年に業成り同八月に賞典授与のことがあった。

蕃所調所

...

「開成所字書」の種本

・・・「開成所」字書の種本といふのは和蘭版の英蘭蘭英小字典で A New Pocket Dictionary of the English-Dutch and Dutch-English Languages といって H. Picard といふ人の編纂したものである。〕^③ 種本となったのは1843版で、堀の手沢本は現に大阪の小山健三氏が珍藏せられる。同氏よりの来翰に依ると堀は舶載の当時米数俵と交換せられたものださうである。其頃は洋書を手に入れるといふことは仲々手易い訳のものでなかったのである。

2. 「最初の英和对訳字書」『英語青年』第三十二卷第二号、大正3年(1914). 10. 15, pp. 56-57

(其二)

装幀と印刷

「開成所字書」の製本は洋装で大サは六寸三分の五寸二分といふ枕本形の横本である。〕^⑩ [用紙は鳥の子で] ^⑪ 頁数は九百九十八頁、語数は一万七千から二万迄である。[印刷は極めて特色のあるもので英字の方は鉛製活字を用い訳語の漢字片仮名は一頁一枚の木版で] ^⑦ [両面摺になって居る。] ^⑨ 印刷は鮮明で我邦初期の横文印刷としては大に誇るに足るものである。当時蕃書調所には「活字方」といふものがあって洋式の手引印刷機と横文活字とが備へてあった。これは和蘭から幕府に献上した品だといふことである。榊令輔と云って今の榊医学博士の厳君に当る人がこの横文印刷の主任をやっていた。・・・仲々器用な人で此人が兎に角蕃所調所の横文印刷を自身に引受け「開成所字書」・・・等を印刷されたのである。之が本邦西洋式印刷の濫觴であらう。

内容

前にも述べた通り対訳字書は「ピカルトの英蘭蘭英小字典を種本としその英蘭の部の英語を其儘印刷しこれに当時既に世に流布していた蘭和字書(「ハルマ和解」とか「和蘭字彙」とか「訳鍵」とかいふ)を参考して各英語に添へたる蘭語をこれ

等の字書に依って邦語に転しこれをそれぞれ英語に付加したものである〕④ からでもなく和蘭か媒酌人となって日英か語学の上に於いて婚礼をやった様になっている。かういふ風にして出来上かったのであるし何しろ草分けの仕事であるから完全はもとより期せられないのである。東西の思想言語の形式が甚しく懸隔していた当時に其懸度をするといふことは今日より幾倍も困難な仕事であったのである。併し・・・大成功で吾人は編纂に力を竭(筆者注 つく)された当時の英学者に対し大に敬意を表するものである。・・・訳の方から言へは第一名前の pocket からして可笑なものだ。種本 Picard は随かに pocket size であるか「開成所字書」の方は六寸、五寸といふ枕本であるから懐へは這入るたらうか pocket へは到底入れられぬ代物で世に「枕字書」と云はれる通り立派に枕の代用になる位な奴である。・・・時代色の顯れた訳語や、訳語未定の為め長たらしく説明的にやった訳などと取交せて次に、

・・・fire-works 日技、post-office 飛脚屋、railway 火輪車ノ道、library 書物ヲ集メ置ク所、(以上は総て再版より摘記せるもの)⑥

訂正再版

開成所字書の初版即ち文久版は僅に二百部しか印刷しなかったのであるから忽ち売切となり〔五年後の慶応二年に再版が発行された。この再版の訂正者は堀越愛国翁で〕⑧ 今に存命され板橋在志村の村居に悠々自適余生を送られて居る。本年八十歳の高齢者である。訂正に当たったのは翁が開成所の教官をせられて居た時で翁の直話に依ると改刻に入費を多く費(か)けたくないから余り手を入れぬやうにとの注文で一頁に一二個所の割合で訂正を加へたのたさうである。当時幕府の金庫は大分疲弊して居たのでこの有用な出版事業にさへ十分の支出を惜んだのである。訂正再版といふのは初版の板木に改正の箇所丈填木をしたのである。・・・初版再版共に刊行部数が少ないのと一方では〔英語研究か旭日の勢を以って日に日に盛になったので最初式両程であった「開成所字書」か後には十両廿両といふ高値で転売されるやうになった。〕⑩ ……この再版は千部印刷をしたか・・・間もなく絶版となってしまった。そこで開成所へ御出入の材木商蔵田屋清右衛門といふ人が許を得て全部木版にして慶応三年に売出し大分儲けたさうだ。・・・新陳代謝の頻繁な新日本の初期のことであるから「開成所字書」はやかて其尽くすべき役目を果し一時は学者の宝典として珍重された「枕字書」も数年の後不用になったのであたらゝ潰されて紙屑屋の手に渡り紙として使はれ又は今日古電話帳か使はれるやうに八百屋等の店売覚帳として用いられた為め今日では大部品少になって居る。蔵田版の方はまた折々古本屋で

見ることかあるか慶応二年版殊に文久の初版になると極めて稀である。(7)

薩摩字書

・・・

(完)

- 3 『日本欧化史の片影＝徳川時代に於ける英語研究』『我等』第三巻、第十二号、我等社、大正10年（1921）、12

一一 最初の板本英和字書

・・・開国に付随して英語研究の必要か切実に感せられるようになったので、英和字典の出版を要望する声が大分高まった。そこで開成所てその編著に従事することになって、文久二年に業を終へている。[これか明治以降出版された幾百の英和字典の母である。]④ 書名は「英和対訳袖珍辞書」で英語では A pocket Dictionary of the English and Japanese Language としてある。・・・用紙は普通鳥の子であるか、洋紙にも印刷したものと見へて、現に僕の所蔵しているものは洋紙である。(8)・・・この文久版は二百部しか刷らなかったので忽ち品切となり、慶応二年に再版が発行された。これは堀越爱国翁かその訂正をせられた。・・・開成所の字書に就ては数年前詳細事項を「英語青年」誌上で発表したから、その方に譲って茲所ては略説に止める。

- 4 『日本英学小史』研究社、昭和11年（1936）1

IV 英学勃興時代 II 英和辞書の刊行

徳川時代に於ける英語に関する最大著作は、何と言っても、開成所出版の「英和対訳袖珍辞書」である。その編纂主任は前記の長崎通詞堀達之助である。台本として使用したのは、Picard の英蘭辞書であるか、当時堀の英語の力は大したものではなかったのであるから、結局既に刊行されていた蘭和辞書等を参考して英語に配するといったやうな方法で完成したものであらうと想像する。それにしても、我より古を作すといふ開山の仕事であるから、その労力は多大なものであったことは勿論である。この開成所辞書は文久二年に刊行されたもので、語数は凡そ二万位。普通は鳥の子紙稀に洋紙の両面に印刷してある。今日から言ふと版式か一寸異なっていて面白い。英字の方は、鉛製活字で、訳の方は一頁一個の木版といふ取合せになっ

ている。…開成所辞書は印刷部数僅かに二百部であったので、忽ち売切れとなり、堀越愛国の再版が慶応二年に発行された。…開成所辞書のことも、少しく精しく解説を加ふべきであるか、これに就ては大正三年の「英語青年」掲載の「最初の英和对訳辞書」と題する拙稿に詳細記述してあるから、茲には略する。

5 「日本で最初の英和辞典」『辞書』月報（11月1日）、研究社、昭和29年（1954）11

我が国最初の英和辞典「英和对訳袖珍辞書」…か、蕃所調所で編纂され、出版されたのは、今からさつと九十年前文久二年十二月のことで、ペルリか米国艦隊を率いて浦賀の門を叩いてから十年後のことである。…この字書の編纂に…最も骨を折ったのは堀辰之助である。…彼は…ペルリか来航した折に、その通訳に当り「通弁骨折り候訳を以て御褒美」として銀十五枚を頂戴しているところを見ると有能な通訳で、当時第一線で活躍したのに違いない。…この辞典は当時僅かに二百部しか刷られなかったので、発売後忽ち売切れてしまい、燎原の火の如き勢をもって広まりつつあった、英学研究熱の渴望を満たすことか出来なかった。そこで、…五年後の慶応二年にその再版が発売された。…一時…英学徒の宝典と珍重された『開成所字書』も…今日では古本屋を漁っても滅多に手に入らない珍本となってしまった。初版は万という高価ものになっている。

以上、『英和对訳袖珍辞書』にふれた大槻論文3本と勝俣論文5本を調査検討してきたか、勝俣論文では、一貫して、初版は僅かに二百部しか印刷されなかったことか述へられている。そして、大正3年『英語青年』掲載の「最初の英和对訳字書」か、初版の発行部数にふれた最初の論文であったことを、ここで確認しておきたい。

IV 発行部数についての若干の考察

1 東京女子大学図書館蔵本末尾の抹消印からの推定

東京女子大学図書館蔵『英和对訳袖珍辞書』初版の本文最終ページにインクかしまいで末尾しか解読できない朱方印が見られるか、（→図版[1]）、筆者か、1999年の1月に、早稲田大学図書館特別資料室での資料閲覧中に、たまたま同席した櫻井豪人会員（当時、名古屋大学大学院生、現茨城大学）から、「開成所刊行」「小型朱印」

(→図版 [2]) の存在のご教示を受け、『西洋武功美談』(*Leesboek voor de Scholen* …、1858年) (早稲田大学図書館蔵) の本文最終ページ右上押捺の同印との比較調査の結果、横幅および最後の「行」の字形が完全に一致した。東京女子大学図書館蔵本『英和对訳袖珍辞書』最終ページのインクで抹消されたような印は、その向きが気になったが、訳語の和語の行の向きに合わせて捺印したと考えられよう。

この「開成所刊行」小型朱印について、櫻井豪人「「開成所刊行」の朱印と開成所刊行物」『汲古』第35号、平成11年(1999)、pp. 19-20からの引用を掲げておく。

「…小型朱印はほぼ慶応元(1865)年以前の刊行物の巻末に捺され、慶応二年以降の刊行物にはそれにとって代わるように大型朱印が捺されている。小型朱印は…開成所と改称された文久3(1863)年8月以降であるはずだが、実際にはそれ以前に刊行された資料にも捺されていることがある。…「開成所刊行」の朱印が捺されていることの解釈として…初印から数年を経た後の開成所時代の後印本であったと考える方が自然であろう。」

洋書調所が開成所と改名したのは文久3年8月のことから、『英和对訳袖珍辞書』に「開成所刊行」印の押捺のあるものがあるとなれば、「初版第2刷」(たとえば、文久3年開成所刊)が存在したとの推定も可能となる。

2. 杉本つとむ『翻訳日本語辞典』昭和51年(1981)解説の推定

初版は、Bの部の Blissfully から Blockhead (pp. 80-81) まだが欠落していることが、知られているが、東京女子大学図書館蔵本では、本文の p. 80と p. 81の間に1葉があって、この欠落部分が印刷されて補われているのである。「同じ文久2年の<初版本>でも、この部分が印刷され片面刷りで製本されたものが存在したかもしれない。」杉本つとむ『翻訳日本語辞典』解説 p. 716とも関連し、初版の印刷部数は、勝俣銓吉郎が、堀越愛国翁からの直話で聞きだしたと思われる200部より、多かった可能性が残されたと考えられよう。

お わ り に

ここで、勝俣銓吉郎の英学史料収集についてのエピソードを紹介する。

勝俣銓吉郎追悼号となった『英語青年』第百五巻、第十二号、昭和34年(1959)、12. 1、p. 30掲載の竹村 覚「日本英学史と勝俣先生」という一文には、次のように

書かれている。

先生の蒐集は、まことに徹底したもので、・・・たとえば、月給をお貰いになると、さっそく早稲田鶴巻町あたりの古本屋に、つぎつぎと借金を払われ、帰宅した時には、月給袋は、ほとんど空っぽになっていたことも、度々あったということである。・・・こうして先生が集められた資料や文献は、実に貴重なものばかりで、英学史研究家は、かならず先生の門を叩かなければ、本当の研究が出来ない有様であった。・・・勝俣先生は、日頃よく、「教師の仕事は、種蒔きである」と言われていたが、・・・私が、『日本英学発達史』を出版した時、次のような歌を作って下さった。

よき土に落ちよとまきし種ひとつ

花さきみのる秋にあふかな

竹村 覚氏同様筆者も、勝俣旧蔵書特に、勝俣旧蔵『英和对訳袖珍辞書』各版の恩恵に深謝しつつ、「花さきみのる秋」を、氏に早く「あわせなくては」と思う次第である。

[注]

- (1) 『日本教育資料』七、文部大臣官房報告課、明治25年（1892）、p. 666には、「文久元年・・・〇八月・・・廿九日・・・英字書成業ノ賞典アリ此字書ヲ成スニハ堀達之助尤モ力ヲ勞スト云」とあり、正しい漢字で「達之助」と書かれている。
- (2) ここで、①～⑪のような数字で示した部分は、後出の勝俣論文と比較調査した部分であり、勝俣論文の同様事項の記述ととくと比較されたい。
- (3) 勝俣銓吉郎が大正3年に『英語青年』に発表した論文によって、『英和对訳袖珍辞書』が、活字印刷による本邦最初の英和辞典である旨、本邦英語界に詳細周知されることになった。
- (4) 大槻「和蘭字典典の記述起原」で「開成所」、大槻『箕作麟詳君伝』で「洋書調所」、勝俣論文で「蕃書調所」と三者三様の記述だが、「洋書調所」が正しい。
- (5) 大槻文彦は、堀の協力者として、『英和对訳袖珍辞書』の PREFACE に名の載っていない高島 太郎・手塚節蔵および渡辺欣三の3名をあげている。この中で、渡辺欣三は、箕作麟詳の門人渡部(辺)一郎(温)と同一人物かと推定されるが、まだ確証はない。
- (6) 「総て再版より摘記」の注により、勝俣は、大正3年の10月には、まだ、初版は入手していなかったことがわかる。また、勝俣「日本欧化史の片影」『我等』第3巻第12号、大正10年（1921）12月に、「・・・現に僕の所蔵しているものは洋紙である。・・・」p. 350と書かれてあり、大正10年には初版を入手していたことになる。そして、その初版は、遺言により、勝俣没後、早稲田大学図書館蔵となり、すでに、岡村千曳氏により、早稲田大学図書館蔵となっていた静岡・加藤則有旧蔵の初版と合わせて2冊の初版を蔵することになり、早稲田大学図書館は、『英和对訳袖珍辞書』調査研

究に不可欠の場となった。

- (7) 豊田實『日本英学史の研究』昭和14年（1939）に、「・・・私の知っている範囲では、大槻家と勝俣銓吉郎氏、及び尾佐竹博士が所有されている。」と、その稀覯本ぶりが紹介されたが、現在、海外に2本、国内に15本、計17本の現存が確認されている。堀孝彦・遠藤智夫『《英和对訳袖珍辞書》の遍歴―目で見える現存初版15本』平成11年（1999）、遠藤智夫・堀孝彦「発掘、第16本目！『英和对訳袖珍辞書』初版」『辞游 file』No.6、平成12年（2000）、および遠藤智夫「牧野富太郎と『英和对訳袖珍辞書』」『英学史研究』第36号、平成15年（2003）参照。
- (8) 本学会の堀孝彦会員と筆者による調査では、現存初版17本のうち、洋紙に印刷されているものは、この勝俣旧蔵初版1本だけである。洋紙の入手は困難だったはずで、この1本は、特別な意味を持つものとも考えられる。

図版〔1〕東京女子大学蔵本末尾の抹消印

図版〔2〕「開成所刊行」小型朱印

What did Prof. Senkichiro Katsumata Contribute to the Study of 『英和对訳袖珍辞書』 = *A Pocket Dictionary of the English and Japanese Language* (sic) ?

Tomo-o ENDO

This report is based on a reading, by the writer, which took place at our Society's 41st national meeting on 31st October, 2004. The year 2004 was a special year for both our Society and Japan as it jointly marked the 40th anniversary of the foundation of our Society and the 150th anniversary of the conclusion of the U.S.-Japan Peace Treaty in the Edo era. This memorable meeting was held at the International Conference Hall at Waseda University, which has had close links to English Language studies in Japan. As one of the main themes of the meeting was English Language studies at Waseda University, the writer read a paper on the late Prof. Katsumata during his time at Waseda University and his close study of 『英和对訳袖珍辞書』.

In 1914, Professor Katsumata, a famous scholar and teacher of English, contributed an article 'On the first Dictionary of the English and Japanese Languages' to 『英語青年』 = *THE RISING GENERATION*, the well-known magazine for English literature and education. By making a comparison between the treatises of Dr. Fumihiko Otsuki and Prof. Katsumata, the writer explicitly points out that in the article contributed by Prof. Katsumata to '*THE RISING GENERATION*', the fact was revealed for the first time that only two hundred copies of the first edition of 『英和对訳袖珍辞書』 were printed in 1862.

The writer also indicates the probability of the second printing of the first edition of 『英和对訳袖珍辞書』.